

廣池千九郎と高橋財政

麗澤大学経済学部 佐藤 政則

はじめに

小論の課題は、高巖教授の若き頃の労作「道徳と経済—金解禁と緊縮政策に関する廣池千九郎の見解—」¹（以下、高論文と略）を手がかりに、在野の社会教育活動家である法学博士・廣池千九郎の目線から高橋財政・高橋是清に対する同時代史的評価を深めることである。

世界恐慌からいち早く脱出させた高橋財政・高橋是清への現代的評価は、「アベノミクス」や「異次元金融緩和」の歴史的モデルであるように、極めて高い。

しかしながら、2.26 事件における反乱将校の銃殺執行者に兵士らになりたがらなかったと言われており²、同時代史的には暗殺された高橋らではなく、反乱将校に同情が寄せられていた。つまり、反乱将校らを異常視し、逆に高橋を持ち上げる現代的評価と当時とは、真逆と言えるほどの大きな乖離がある。

当時、なぜ高橋の経済政策に相応の評価が与えられなかったのか、廣池千九郎の論評を検討することによってこの一端を明らかにしたい³。

廣池には、明治 19 (1886) 年から亡くなる昭和 13 (1938) 年に至る日記が『廣池千九郎日記』全 6 巻として残されている。その別巻の人名索引によれば、高論文が政策論的に近いと指摘する井上準之助の 2 回に対して、高橋是清は、活躍期間の違いもあるが、7 回も登場する。もっとも記載のほとんどは、両者とも「藤井蔵相やめ、高橋是清就任」（1934 年 11 月 28 日）といった時事的記述である。廣池は高橋と直接的な面識はないはずであるが⁴、強い関心をもっていただけ、高橋財政を考える上で重要な指摘を残している。

廣池から高橋是清はどのように見えたのか、まずそこから始めよう。

1. 廣池千九郎の高橋財政批判

¹ モラロジー研究所編『モラロジー研究』第 42 号、1996 年 6 月。

² 小泉信三「木曜会」、『小泉信三選集』第 2 巻、文芸春秋新社、1957 年、134 頁。このほか、岡千里・東谷暁「昭和恐慌 高橋是清かく語りき」『文芸春秋』2002 年 4 月、264～275 頁、も参照。

³ 小論は、平成 29 年度道経一体経営講座（2017 年 11 月 25 日）において行った講演原稿を全面的に改稿したものである。なおこの講演は、平成 28 年度日本道経会研究助成の成果の一部であり、また 2017 年の資料収集ではモラロジー研究所道徳科学研究センター（現：モラロジー道徳教育財団道徳科学研究所）図書室のお世話になった。関係各位に改めてお礼申し上げたい。

⁴ モラロジー研究所編『伝記 廣池千九郎』には廣池が 1933 年に高橋蔵相とも面会したかのような記述がある（588 頁）。また付録「廣池千九郎略年譜」の 1933 年 5 月には「首相齋藤実を訪問。大蔵大臣高橋是清に面会」とある（729 頁）。しかし、これは『日記⑥』1933 年 5 月 9 日に付記された「5 月 22 日 首相、高橋に懇談。同氏留任。」を誤読したものであろう。日記の記述は、齋藤実が未定であった蔵相への就任を高橋に要請し承諾を得たことを意味している。

⁵ 例えば、1936 年 5 月 3 日の日記には、2.26 事件後の 5 月 14 日に発行され、高橋是清の議会答弁や論説等をまとめた『高橋是清経済論』（上塚司編、千倉書房）の新聞広告切り抜きが挟み込まれていた。なお同書は、2013 年に中公クラシックス『高橋是清経済論』として高橋是清『随想録』と共に再刊されている。

道徳心の涵養が最も根本的だとする廣池千九郎と「實際家」を自称する高橋是清とでは、その経済政策観はほとんど正反対であった。

例えば、基本的スタンスを成す金本位制について廣池の考えをみると、1931年9月に起きたイギリスの再建金本位制離脱と満州事変によって日本の金本位制維持も危うくなった状況下で、次のように金本位制のほうが道徳心の涵養に有効だと述べ、金本位制を支持していた。

「金本位制は物品の標準たる貨幣の値、高くして其額少きが故に之を得る事難し、故に儉約と勤勉とを要す 即ち緊縮と力行とを要するが故に 人間の道徳心を保持するに効あり 故に之を維持する事は国家国民の為に 望ましきこと也」⁶

したがって1931年12月13日の高橋是清を蔵相とする大岡毅政友会内閣の誕生に廣池の危機感が高まった。当日の日記には「政友会内閣成立。(一)金本位停止。(二)兌換禁止。右の結果、株式暴騰、物価および二割方騰貴、外国為替および二割方下落。一時の空景気はやがて一大恐慌を生ぜん。真に国歩艱難の秋来れり(後略)」⁷とある。

高橋蔵相が日銀引受によって大蔵省証券を発行したのは1932年10月27日、財政補てんの赤字国債を同じく日銀引受で発行したのは同年11月25日である。廣池が同年11月20日の大阪講演メモとして書き残しているものには、赤字補てん国債の発行を批判するだけでなく、高橋財政の致命的な弱点をも指摘している。引用文注の下線とその番号は引用者による。

「赤字補填に公債の増発は国を危くす 故に増税を可とす 増税がスーパータックス(富裕税)によるべし ①高橋氏は旧式の経済学なる一つは(原文ママ) ②財界の 財閥に縁深く之に左右せら

れて増税を為し得ず 遂に国を誤るに至る」⁸

「公債の不利は(1)通貨膨張と為替とによりて物価高となる (2)物価高は国民の支出予算と国家の歳出予算をくるわするにより公私共に困難 (3)公債の利子払は<中略>八千五百万円に上ると云 これも又公債による時には③昭(和)六(年)に六十億の公債なりしも 昭和十年頃には百億に達す」⁹

「増税は一方には国民の経済心の緊縮と為り健全の思想を維持するを得 又一方には通貨の増額を来さず物価の安定と為り 殊にスーパータックス其他所得税相続税営業税の増額 ④国民の富の平均を来して一般国民の安定に利あり」¹⁰

まず①「高橋氏は旧式の経済学」と指摘している点は非常に興味深い。現代では、高橋は有効需要政策を先取りしたとみなされており、ケインズ経済学の先駆けとまで言う研究者もいる。つまり当時としては、むしろ新しい経済学ととらえられているのである。真逆の評価と言えよう。廣池が「旧式」と認識したのは、高橋は②の財閥との関係が深く、④の税を通じた所得の再配分的な視点もないと映ったからであろう。

次にその②財閥との「縁」が深いという点だが、これにも相当な違和感がある。当時の代表的な財閥は、安田などの金融財閥や第一次大戦後の新興財閥に対して総合財閥と呼んでいる三井、三菱、住友であろう。たしかに安田財閥に関しては、日銀時代から安田善次郎との交友があり、善次郎刺殺後の安田の面倒を高橋はみている。しかし高橋が日銀総裁・副総裁から7度にわたる大蔵大臣まで、これら総合財閥と関係があったとは、到底思えない。

しかし廣池の高橋観と重なっているのが、実は2.26事件を起こした反乱将校であり、なかでも磯部浅一と共に急進派であった栗原安秀(陸軍歩兵中尉、歩兵第1連隊附)であった。栗原は軍法会議公判において「今回襲撃したる者及西園寺公以外にも襲撃目標ありや」との問いに答える中で「要路の大臣を

⁶ 1931年11月22日、大阪講演メモ、モラロジー研究所編『廣池千九郎博士資料集』1、149頁。以下『資料集』と略。なお、引用ではカタカナをかなに代えている(以下同)。

⁷ 『日記④』195～196頁。

⁸ 1932年11月20日、大阪講演メモ、『資料集』1、208頁、引用文中()内および下線は引用者、以下同。

⁹ 同上、208～209頁。

¹⁰ 同上、210頁。

多く殺害するのは効果的でなく却て外国の革命等の様に思はるのである程度に止め元老重臣『ブロック』に重点を置いて遣ったのであります。私共は一挙に事を挙げ市民が驚いて居る中に勅命を仰ぎ、後は整然と遣る積りであります。資本家財閥を遣らなかつたのは余り手を上げ度くなかつたからで、第二次的には考へないでもありませんが高橋蔵相を資本家的財閥の代表者として倒したのであります。」¹¹と述べている。

さらに1932年に井上準之助、団琢磨を暗殺し血盟団事件を引き起こした井上日召は、「然らば国力発展に伴ふ富力を少数財閥のみが占有して、国民大衆は却って借金増加に困苦する様な悪組織悪制度は果して何人の意思に依って定められたものであろうか。」「結局社会の最大害悪の中心点は財閥と政党との野合団にあるやうだ。而して特権階級、軍閥、官僚等がこれを支持して居るやうに思はれる」¹²と述べている。この見方の延長に、高橋蔵相＝「資本家的財閥の代表者」がある。

このようにみていくと、暴力への依存は決定的な相違だが、高橋をはじめ日本社会に対する認識において廣池と栗原、さらには井上日召との差は決して大きくはない¹³。換言すれば、現代では異常視される反乱将校や井上日召であるが、同時代的には必ずしも異常ではなく、むしろ廣池のような在野の社会教育活動家と大差ない「正常な」認識だったのではないだろうか。

続いて③の昭和10年には残高100億円になるという廣池の見通しは、見事に的中している。1931(昭和6)年末の国債現在高6,188百万円は35年末には9,854百万円¹⁴になった。また④の高額所得者に対する選択的な増税であるが、富裕税の徴収によって所得分配の不平等性が軽減されると考えている。これは、増税をしない高橋との違いだけではなく、所得分配の不平等性自体を問題視しない高橋との重

要な相違である。その意味では、すでにソビエト連邦が誕生している国際環境であるにもかかわらず、高橋の視野は「旧式」であつたかもしれない。

なお『日記』や『資料集』には、日銀引受の国債発行であることや、日銀による引受国債の売却(売りオペ)など、現代的には注目される事柄だが、それらに関する記述は見当たらない。

最後にもう一つ廣池の政策的特徴を示す論点を挙げておく。それは、1933年6月11日に齋藤総理と高橋蔵相に打電した以下の電文である。

「オーソドックス・プリンシプルの財政学の本づき、入るを量って出づるを制し、首相と蔵相との国家本位の御裁量によりて決定すれば、各省の予算争奪はおのずからできぬことになります。一切を顧慮せず、この国民本位の予算編成に御邁進あらば、万世不朽の世界的善事と存じます。ただ⑤陸海軍の軍費のみは、今日の場合その要求を容ることもろくなとす、私は学問の原理からと国家百年の大計とから、切にこのことを祈り奉る。」¹⁵

この電文は、予算編成への取り組み姿勢について決意を促したものである。すでに廣池は、1933年4月10日に旧知の齋藤実首相あてに長文の「建議書」¹⁶を提出しており、さらに同年5月9日には首相官邸において齋藤首相と隔意のない意見を交わしていた¹⁷。電文は、予算編成にあたって「建議書」の核心を簡潔に示しており、それは、(A)歳入に応じた歳出に徹すること、(B)ただし満州事変・上海事変などの軍事費にはこれを適用しない、というものである。

(A)の「入るを量って出づるを制し」は廣池の持論であり、その限りでは理解できる。しかし(B)を行えば(A)は瓦解するだろう。歳出膨脹の最大の要因が、戦火の拡大によって増加する事変費であるあ

11 「栗原安秀 第8回公判調書」、池田俊彦編『二・二六事件裁判記録』原書房、1998年、188頁。

12 井上日召「梅之美」、『現代史資料5』、374～375頁。

13 高論文は、1930年前後における日本のガバナンスに対する廣池の怒りが、あたかも乗り移つたかのようなタッチで書かれている。そこで描かれた日本社会は、栗原や井上日召の現状認識と大差ない。

14 数値は『昭和財政史 第6巻 国債』(1954年)巻末統計、3頁。

15 『日記⑤』39～40頁。

16 この「建議書」全文は、モラロジー研究所『道経一体経営原論：廣池千九郎の経営論とその現代的展開』(2019年)の参考資料に収録されている。

17 齋藤首相と廣池とのやり取りの様子は『日記⑤』27～32頁に詳細な記載がある。

ることを廣池が知らないはずがない。しかも、1932年2月には懇意の鈴木貫太郎侍従長（当時）あて手紙の中で、上海事変を念頭に南中国からの日本人と日本軍隊の「引き上げ」という大胆な提言を行った廣池¹⁸が、翌年には（B）を提示するのであるから、ますます困惑する¹⁹。

日銀引受国債発行と日銀による引受国債の売りオペにより国債の発行と流通を円滑化させ、満州事変以降の軍事費を捻出したのが高橋であり、高橋財政であった。したがって（B）の提示によって廣池の高橋財政批判は、画竜点睛を欠くことになるのである。

2. 高橋は「資本家的財閥の代表者」か？

廣池の言うように高橋は財閥との縁が深いとは筆者はみていない。ましてや「資本家的財閥の代表者」とは考えられない。しかし、そのように見えるかもしれないという要素は、高橋自身の政策論にも高橋財政のあり方にもある²⁰。

高橋が行う金融財政政策の質的特徴は、①現状を前提に最善と考える方策の実行、②国益公益重視の金融統制、③自主・自立（自律）を尊重する放任主義、という3要素で構成された現状の改善にある。高橋は改革者ではない。自ら「その場合場合によって適当な処置を実行して行く」「實際家」²¹と語っているが、その意味で現状維持志向であった。自立した個々人の懸命な努力による上昇を何より尊重しており、その結果として「著しい『分配の不平等』が未解決」²²となった。反乱将校には、こうした特徴が都市の失業問題と農家経営の困窮化に対する放置ととらえられたのである。

高橋財政を支えたのは日銀引受国債発行であり、

日銀売りオペによる円滑な国債消化力であった。しかし問題も残った。日銀売りオペの成否は、シンジケート銀行によって、さらには三井銀行と三菱銀行によって左右されていた。これが、高橋財政期における国債消化力と言われたものの実態であり、それを突き詰めれば、三井、三菱の財閥銀行における国債への投資余力とその意思決定であった。

高橋財政における歳出と歳入のあり方にもかなりの温度差がある。歳出面は満州事変費など非常時の財政運営であったが、歳入面では増税を忌避し平時の仕組みのなかで日銀引受国債発行と売りオペを実施し続けた。いわば非常時を平時で支える構造であった。しかも高橋蔵相は、投機以外の経済行動への不介入、放任を基本としていた。この結果、非常時財政の帰趨が財閥銀行の自律的な経営行動に委ねられるという、珍妙な様相が続いた。これは、高橋にとっては正常かもしれないが、総力戦体制を学び非常時に身を置く第三者には非正常と映ったのである。

高橋財政の機能性や有効性の程度は、大蔵省、日本銀行、財閥銀行という三者間での、思惑の違いを含んだ連携に依存していた。この金融財政ガバナンスのあり方が、第三者的には三位一体のインナー世界に映ったとしても不思議ではない。高橋は、当人の自覚を別として、間違いなくこのインナー世界の要の位置にいたのである。

おわりに代えて—廣池と高橋の明治

廣池が労働問題の道徳的解決を提唱し始める1910年代は、外債募集に成功した高橋の存在が、金融界はもとより政財界において大きくなっていく時

¹⁸ 『日記④』205～209頁。

¹⁹ 高論文も斎藤首相あて「建議書」に言及するが、この事変費適用除外に触れていない。高論文だけではなく、前掲『伝記 廣池千九郎』もそして最新の廣池研究である橋本富太郎『廣池千九郎』（ミネルヴァ書房、2016年）もこの点に論及していない。なお、廣池の平和論については、梅田徹「晩年の廣池千九郎と日本の対外関係」『モラロジー研究』第35号、1992年3月が必読の研究であろう。また高巖「日米関係と廣池千九郎の思想—日本の国際化と戦前の移民問題」『モラロジー研究』第25号、1988年9月も参照。

²⁰ 以下については、佐藤政則「高橋財政期の国債消化力とは何だったのか」法政大学『経済志林』82(4)、2015年3月。同『日本銀行と高橋是清』麗澤大学出版会、2016年。同「国債の市中消化 『売りオペ』成功させた高橋是清」『エコノミスト』95(19)、2017年5月16日。同「高橋財政と国債消化力」日本金融学会『金融経済研究』第40号2018年1月を参照。

²¹ 前掲岡千里・東谷暁「昭和恐慌 高橋是清かく語りき」、265頁。

²² 武田晴人「昭和恐慌 高橋是清は格差を拡大した」『大人の近現代史入門』、『文芸春秋 SPECIAL』2015春、所収、41頁。また同「二・二六事件」『新版 日本経済の事件簿（3版）』、日本経済評論社、2014年、所収も参照。

期でもあった。それは同時に、日本が軽工業中心の産業革命に成功し、日清・日露の戦争をなんとか凌ぎ切り、国際的プレゼンスを高めた時期であった。換言すれば、日本が東アジアの諸国や地域から最も輝いて見えた時期である。

明治の末年に廣池千九郎は法学博士の学位を授与され、また男爵・高橋是清は、日本銀行総裁に就任する。譜代名門である中津藩奥平家の中規模農家の長男が廣池であり、仙台藩伊達家の足軽の家が高橋の養家であった。江戸時代においてもある程度の社会的上昇はあり得たが、身分と身代に応じた言動を尊ぶ「分限思想」の江戸社会では、廣池は中津藩の農民として、高橋は仙台藩の足軽として生涯を終わっていたと思われる。

個人も国家も「実力相応」で社会的上昇が可能になる、これが明治という時代の凄まじさであり、エネルギーの源泉であった。その意味で、廣池も高橋も「末は博士か大臣か」という時代の体現者であり、成功者である。しかも共に薩長閥の対極から実力を基礎に伸ば上がった数少ない成功者であった。彼ら

の成功は、ほかの明治の成功者と同様に、明治という時代になってはじめて実現されるものであった。

したがって両者とも、明治以降の日本社会の信奉者である。そこでは、自己と国家との成功を重ねて、一体的にとらえることができたのである。

他方で、平和ボケした現代日本からは、なかなか理解できないことかもしれないが、明治という時代は、19世紀における国際社会の常識である平時と戦時の共存・併存を具備していた。政治・外交、軍事、経済の三者は不可分の関係にあった。廣池の理解者でもあり、大蔵大臣を務めた阪谷芳郎は、大蔵省官吏時代に、これを「武装したる平和」と表現している²³。

廣池にしても高橋にしても、この「武装したる平和」という論理（現実）は常識であり、財政支出の一定程度を軍事予算が占めるのは当然であった。おそらく問題の所在は、軍事と経済とのバランスなのであろう。このバランスとそのコントロールにおいて廣池の高橋財政批判は、徹底さと一貫性を欠いていたと言えよう。

²³ 詳しくは拙稿「阪谷芳郎の明治—日清戦後の経済構想」、前掲『日本銀行と高橋是清』所収を参照。

参考:略年譜

廣池千九郎		高橋是清	
		1854 安政1	江戸で誕生、仙台藩足軽高橋家へ里子(のち養子)
1866 慶応2	現・中津市で誕生		
		1867 慶応3	渡米、翌年12月帰国
1868(慶応4,明治1)年 明治維新(戊辰戦争)			
		1869 明治2	大学南校教官三等手伝
		1870 明治3	放蕩生活へ
		1873 明治6	文部省督学局十等出仕
1877(明治10)年 西南戦争			
1880 明治13	永添小学校助教		
		1884 明治17	農商務権少書記官
1885 明治18	形田小学校六等訓導		
		1887 明治20	農商務省特許局長
1888 明治22	中津高等小学校訓導		
		1889 明治22	非職、ペルーへ。翌年帰国
1892 明治25	京都着	1892 明治25	日本銀行建築所事務主任
1894,95(明治27,28)年 日清戦争			
1895 明治28	上京、『古事類苑』編纂助修	1895 明治28	横浜正金銀行本店支配人
		1899 明治32	日本銀行副総裁
1904,05(明治37,38)年 日露戦争			
		1904 明治37	外債募集へ
1905 明治38	早稲田大学講師		
1907 明治40	神宮皇学館教授	1907 明治40	男爵
1909 明治42	天理教入信		
1910 明治43	学位論文提出		
		1911 明治44	日銀総裁
1912 明45/大1	法学博士		
		1913 大正2	大蔵大臣(山本権兵衛内閣)
大正3年(1914~1918)第一次大戦 大戦ブーム(1915年夏頃~1920年春)			
1915 大正4	天理教本部引退		
			大正6年(1917)9月 金輸出禁止(金本位制停止、変動相場へ)
		1918 大正7	大蔵大臣(原内閣)
			大正9年(1920)3月 反動恐慌始まる
		1920 大正9	子爵
		1921 大正10	原暗殺により総理兼蔵相、政友会総裁
			大正12年(1923)9月 関東大震災
		1924 大正13	爵位返上、衆議院議員当選
1926 T15/S1	「モラル・サイエンスの論文」謄写版印刷完成		
	同日をモラロジー研究所創立日とする		
昭和2年(1927)3月 金融恐慌始まる			
		1927 昭和2	大蔵大臣(田中内閣)
			昭和4年(1929)7月 民政党・浜口内閣成立(幣原外交・井上財政始まる)
			昭和5年(1930)1月 金解禁(金本位制復帰) 世界恐慌が日本にも波及、昭和恐慌始まる
			昭和6年(1931)9月18日 満州事変始まる 9月21日 イギリスが金本位制離脱
		1931 昭和6	大蔵大臣(犬養内閣)
			昭和7年(1932)2月 井上準之助前蔵相暗殺 3月 三井合名団琢磨理事長暗殺
		1932 昭和7	大蔵大臣(斎藤内閣)
		1934 昭和9	大蔵大臣(岡田内閣)
1935 昭和10	道徳科学専攻塾開塾		
		1936 昭和11	2.26事件、逝去
昭和12年(1937)7月 盧溝橋事件発生し日中全面戦争へ			
1938 昭和13	逝去		